

30208

教科書文庫

3
810
32-1900
2000 302682

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

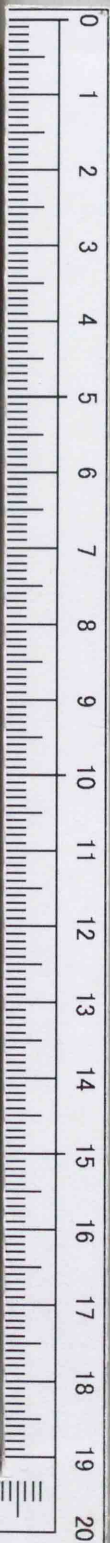
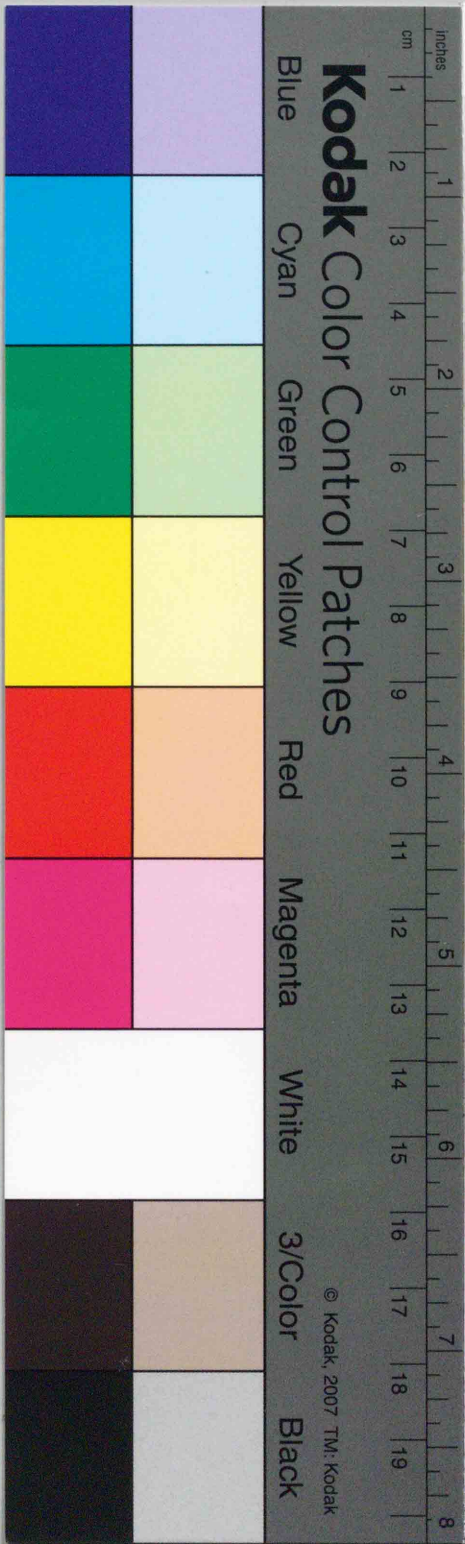


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Nilg  
資料室

高等小學讀本 卷三



資料室

3757  
N19

明治三十三年一月十日 文部省檢定  
高等小學教科書讀本



高等小學讀本卷之三

目次

第十一課	國體	五
第十二課	我が故郷	十七
第十三課	櫻	二十一
第十四課	吉野山	二十三
第十五課	霞	二十六
第十六課	栽樹	二十八

高等小學讀本卷之三

高等小學讀本

東京

國光社藏版

伯爵 副島種臣 閱  
伯爵 東久世通禧 閱  
西澤之助 編





第七課 古橋輝兒

二十一

第八課 朝鮮國

二十五

第九課 支那

三十

第十課 滋賀の都

三十三

第十一課 衣服

三十六

第十二課 染料

四十

第十三課 池野大雅

四十二

第十四課 讀書

四十八

第十五課 衛生

五十二

第十六課 温泉

五十五

第十七課 交通

五十七

第十八課 商人

六十

第十九課 信用

六十四

第二十課 爲替

六十六

第二十一課 身の垣

六十九

第二十二課 衣笠城趾

七十二

第二十三課

元寇

七十五

第二十四課

日本刀

八十

第二十五課

みくにのまもり 八十三

第二十六課

新田

六十四

第二十七課

高八

六十四

第二十八課

文庫

六十五

第二十九課

盛泉

六十六

第三十課

圖書

六十七



高等小學讀本卷之三

伯爵 東久世通禧 閱

伯爵 副島種臣 閱

西澤之助 編

第一課 國體

我が皇室は、天祖の御正統を受けさせ給ひ、連綿として、どこしへに、四海に君臨せさせ給ひ、我等臣民は、皇室を幹として、枝

を分ち、祖先以來、協同して、大宗家とましま  
す、皇室に奉事し來れり。

此の如く、君臣の分は、開闢の初に定まりて、  
其の親は、猶父子のごとく、皇室は、永く、臣  
民の大父母とましく、て、限なき御惠をた  
れさせたまひ、同胞一體の臣民は、常に、忠孝  
をはげみて、他心あることなし。

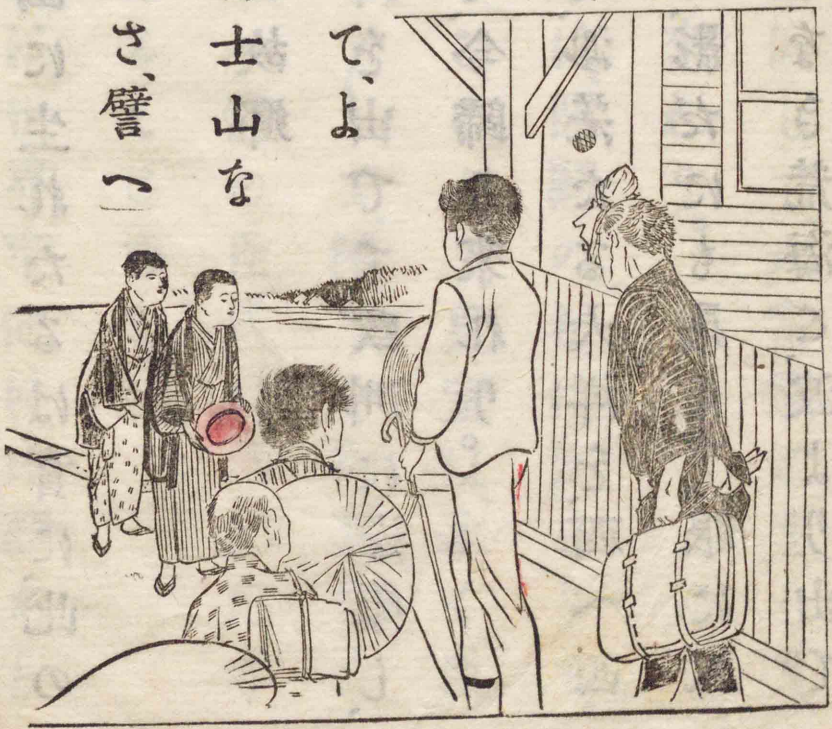
かゝる美しき國體は、世界中、他に、比類あら  
ず。吾等が、この皇國に生れたるは、實に、此の  
上もなき幸なり。

第二課 我が故郷

我は、數年前に、故郷を出でて、歐洲に遊學し、  
北米合衆國を経て、今歸り來れり。

船は、桑港を出でて、渺茫たる大洋を、西へ西  
へと進むに、陸地ハ、影だにも見えず。眼に入  
るものは、只、はてもなき荒海と、波より出で

て、波に入る日と月  
 どのみなりき。  
 二週日の後、水煙の  
 間に、雲の如きもの  
 現れたり。瞳を定めて、よ  
 く見れば、是、わが富士山な  
 り。此の時のうれしさ、譬へ  
 んに、物なかりき。



船の進むに随ひて、蒼々たる、房総の山も、ま

ぢかく見ゆ。赭山をのみ見なれたる

眼には、霜枯の草木、春に遭ひて、俄

に色めきたらんがごとき心

地す。

こなたかなたの燈臺の、灼々

たる光を放ちて、波浪を照ら

す頃、船、横濱に着きて、久しく



慕はしかりし、わが日本の土地をふむを得たり。

翌日、汽車に乗りて、故郷に歸る。弟妹は、門に迎へ、父母は、恙なきを喜び給へり。親族、故舊は、かはるゝ訪ひ來て、種々の物語、終日盡きせず。

我が幼かりし時遊びし山川も、昔にかはらず。氏神の森、城山の櫻など、益茂りて、翠深し。

學校は、建築改まりて、宏大となり、我が師も、壯健にて、今も、生徒を教へ導き給ひ、朋友は、何れも、家業に勉勵せり。

世界廣けれども、おのが故郷より樂しきはなし。いで、今より、益、家業を勵み、故郷の爲に、力を盡して、その繁榮を圖りてん。

第三課 櫻

櫻は、山櫻の、葉赤くして、細きが、まばらに交

りて、花繁く咲きたるは、たぐふべき物もな  
く、美し。葉青くて、花のまばらなるは、いみじ  
くたどりたり。  
大方、山櫻といふ中にも、しなくあり。細に  
見れば、木毎に變れる所ありて、全く同じき  
はなきやうなり。  
又、今の世に、八重、一重などいふも、様變りて、  
いとめでたし。

すべて、曇れる日の空に見あげたる花は、色、  
鮮ならず。松などの、青やかに繁りたる此方  
に咲ける花は、色はえて、殊に見ゆ。空、清く晴  
れたる日、日影さす方より見たるは、にほひ  
ならぶものなくて、同じ花ともれもはれざ  
るなり。

(本居宣長の文集による)

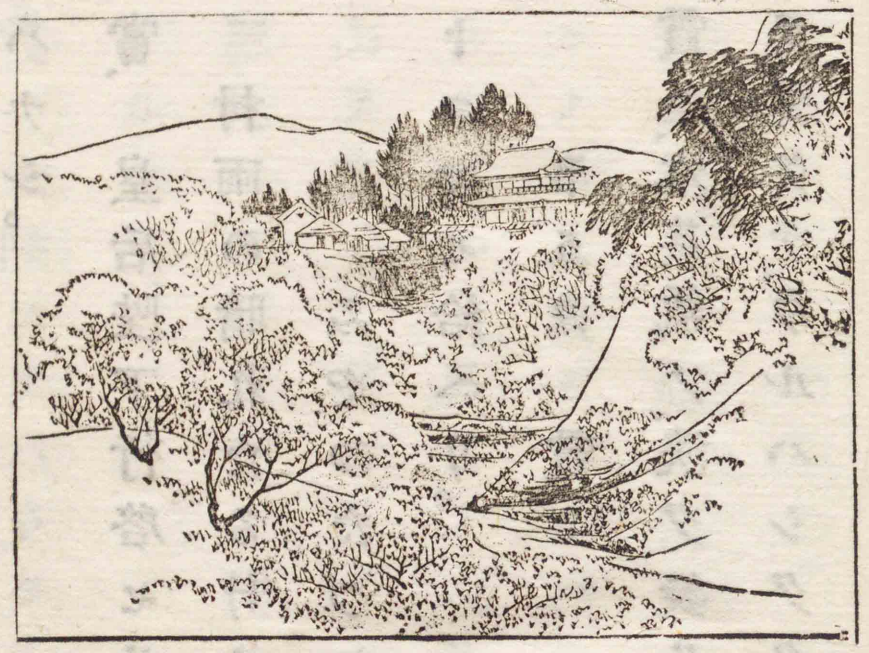
第四課 吉野山

吉野山ハ、大和ノ吉野郡ニアリ。山中、櫻樹多



ク、花盛ノ頃ニハ、恰、白雲ノ掩ヘルガ如シ。中  
ニモ、一目千本、奥ノ千本ナドノ眺望ハ、實ニ、  
人ノ目ヲ驚カシム。

吉野山かすみの奥ハ知らねども  
見ゆるかざりは櫻なりけり  
ト、古人ノ詠ミケンハ、ヨク、ソノ様ヲ述ベタ  
リト謂フベシ。  
コノ山ハ、古ヨリ、代々ノ天皇、シバノ行



幸セサセ給ヒ、殊ニ、  
南朝、四代、五十餘年  
ノ間、行在所ノアリ  
シ處ナレバ、コ、ニ  
遊ブモノ、吉水院、如  
意輪堂等ノ古跡ヲ  
タヅ子、昔ヲシノビ  
テ、袖ヲヌラサ、ル

ハナシ。

六

嘗、皇后陛下行啓セサセ給ヒシ時ニモ、

村雨の晴れたるけふもふりし世に

みやおたづねて袖ぬらしけり

トヨマセ給ヘリ。

第五課 霞

霞ハ、水蒸氣ノ、淡ク凝リタルナリ。ソノ、日光ヲ受ケテ、ウルハシクタナビケルサマハ、筆

紙ニ盡スベカラズ。

春ノ朝、トク起キ出デテ眺ムレバ、四方ノ山々ノ、ウチ霞ミタルハ、薄ギヌヲ引キ渡シタランガ如シ。又、日ノ入リアヒニ、薄ク、濃ク、野山ヲ色ドリ、或ハ、月モ、オボロニ立チ籠メテ、影見エヌ雁ガ音ノ聞ユルナド、何トナクノドカナリ。

霞ハ、大陸ニテハ、多ク見ルコト能ハザレド

モ、我が國ハ、四方、海ニテ、水蒸氣ニ富メルガ  
故ニ、カク美シク顯レテ、面白キ春ノ景色ニ、  
一キハ、趣ヲ添フルナリ。

山 文法

動詞ハ、語尾又ハ、全体ヲ變化ス。例へバ、凝  
り、得トイフ動詞ノ、凝ら、凝り、凝る、凝れ、に、  
ラトナルガ如シ。之ヲ、活用トイフ。

第六課 栽樹

四方の山々、霞たなびきて、春の景色だちた  
る頃より、父と兄とハ、耕耘の暇に、種々の苗

木を植ゑつけらる。

數年前に植ゑたりし桑ハ、十分に成長し母、  
と姉との、蠶を養はるゝに、不足なき程とな  
れり。

彼處の山には、祖父の、丹精してうゑられし  
松、杉、茂り、緑の色の、四時、變りなき状を見れ  
ば、自、敬慕の心起る。この林は、父の培養せら  
れたるにて、日常の薪を資りて、餘あり。

家のまはりには、數十本の桐立ち並べり。こ  
は、わが教育の費に充てんとて植ゑられし  
ものにて、はや、十二年を経たり。此の外、春は、  
梅、桃、櫻など咲きつゝ、き、秋は、柿、梨、葡萄、蜜柑  
など實りて、樂少からず。

古語に曰はく、一年の計は、穀を植うるにあ  
り。十年の計は、樹を栽うるにあり。百年の計  
は、徳を樹うるにありと。されば、人は、後の爲  
をも思ひて、永遠の計をすること、肝要なり。

第七課 古橋輝兒

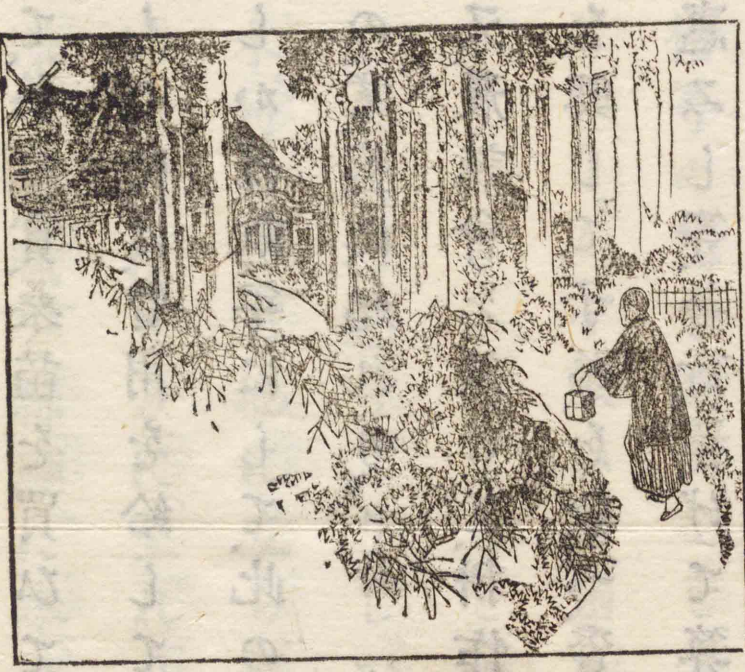
穀を植ゑ、樹を栽ゑ、徳を樹ゑて、子孫百年の  
計をせし人多きが中に、古橋輝兒の如きは  
稀なり。

輝兒は、三河の人なり。幼時、家産衰へたりし  
かば、之を挽回せんとて、日夜苦慮勤勉した  
りき。長ずるに及びて、只管心を、山林の業に

傾け、家産未豊ならざるに、自資を捐て、杉  
 檜等の苗を購ひ、之を全村に頒らて栽ゑし、  
 めけり。人々厭ひて、苗木を焼き拂はんとす  
 るものさへありしを、輝兒誠意を以て、之を  
 諭し、栽培怠らざりしかば、今は、數萬本の大  
 木、村の共有地に立ち並び、人皆輝兒の徳を  
 仰がぬはなきに至れり。

輝兒嘗職を縣廳に奉ぜし時、其の俸給を以  
 て、茶の實、桑苗を買ひて、村民に與へ、貧しき  
 ものには、費用を給して、之を栽ゑつけしめ  
 しかば、數年にして、此の地方に、製茶、養蠶等  
 の業、盛に起れり。

又、農談會を設けて、耕作のことを奨め、學校  
 を興して、子弟を教へ、資財を投じて、貧者を  
 惠みし等、善行、擧げて算ふべからず。常に、儉  
 素を守り、身に奉ずること薄かりしかども、



公益の爲には、毫も、吝むことなく、何事も、自  
 率先して、人を導き  
 しかば、感化せられ  
 ざる者なかりき。  
 性、孝順の心深く、嘗  
 父の病みし時には、  
 寢食を忘れて看護  
 し、氏神の社に詣て

て、全快を祈りけり。かくて、幸に、病癒わしか  
 ば、神恩を忘れじとて、毎夕、社に、燈火を獻ず  
 ること、身を終ふるまで怠らざりき。

又、尊皇の志篤く、或年、畝傍山の御陵を拜せ  
 しときの如きは、人、その敬禮の厚きを見て、  
 大に感激したりきとぞ。

第八課 朝鮮國

亞細亞ノ大陸ハ、沿岸ノ諸山、概、赭山ニシテ、

樹木少ク、氣候、風物、自異リテ、我が國ニ比スレバ、頗荒涼タリ。近ク、朝鮮ノ如キモ然リ。

朝鮮ハ、對馬海峽ヲ隔テ、我が九州ニ隣リ、東ハ、日本海ニシテ、西ハ、黃海ナリ。北ハ、豆滿江ニテ、露國ノ西、比利亞ト界シ、又、鴨綠江ヲ隔テ、支那ノ滿洲ト接ス。大サハ、我が國ノ半ニ當リ、人口、一千萬ニ近シ。氣候ハ、寒暑、共ニ甚シク、土地、肥沃ニシテ、農業開ケ、大豆、米、

穀、人參、牛皮等ヲ産ス。

國內ヲ、八道ニ分ツ。全羅、忠清、京畿、黃海、及、平安ノ五道ハ、田野相連リテ、河流ニ富ム。慶尚、江原、咸鏡ノ三道ハ、山岳多シ。然レドモ、樹木ハ、人民ノ伐採ニ任セテ、植エツクルコトナケレバ、概禿山ナリ。首府ヲ、漢城、或ハ、京城ト云フ。我が公使館ノアル處ナリ。漢江ニ沿ヒテ、西ニ下レバ、仁川

港アリ。我が居留民、頗多ク、釜山、元山、木浦、鎮南浦ト共ニ、外國貿易ノ要港タリ。

漢城ノ南、十數里ニ、成歡、及、牙山アリ。牙山ノ海岸ヨリ、北ノ方仁川ニ到ル海中ニ、豊嶋アリ。共ニ、日清戦争ノ、初メテ起リシ地ナリ。漢城ヨリ、遠ク、北ニ進メバ、大同江ノ岸ニ、平壤アリ。亦、日清兩軍ノ激戦セシ地ナリ。

此ノ國、古ハ、高麗、百濟、新羅等ニ分レタリシ

ニ、後、合シテ、一國トナリ、五百年前ニ、今ノ王家李氏、其ノ主トナリテ、朝鮮トイヒ、近頃、改メテ、韓ト號セリ。

神功皇后御親征ノ後、久シク、我ニ來貢セシニ、屢、變革アリテ、支那ノ屬國ノ如キ姿トナリキ。其ノ後、豊臣秀吉、之ヲ征服セントシテ、果サズ。近年、我が國ノ助ニヨリテ、全ク、獨立國トナルニ至レリ。

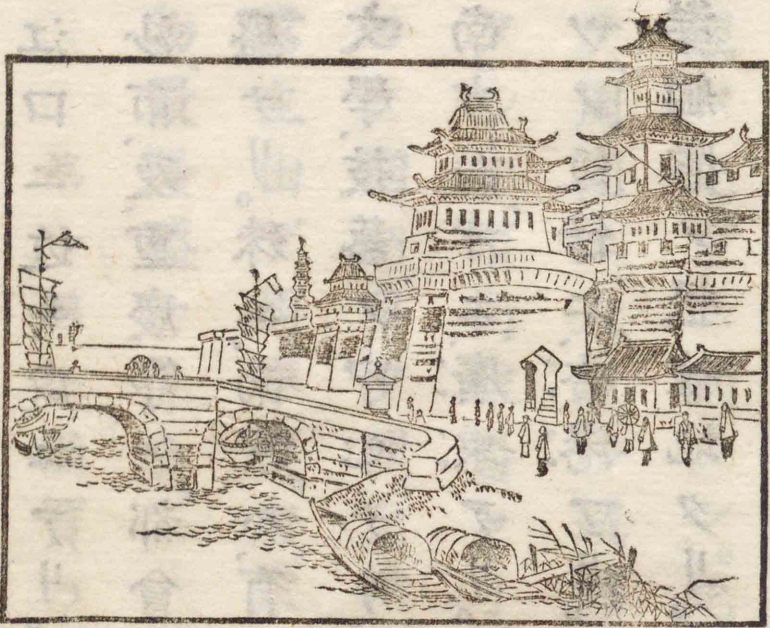


第九課 支那

支那ハ、今、清ト稱ス。朝鮮ノ北ニ隣レル大國ニテ、大サ、殆、歐羅巴全洲ト等シク、人口、凡四億アリ。東南ハ、海ニ面シ、西北ハ、山脉ヲ以テ、露國ノ西比利亞ニ接シ、西南ハ、印度、緬甸、及、安南等ニ續ケリ。

北部ハ、氣候寒冷ニシテ、冬日、河水氷結シ、舟楫ヲ通ゼズ。南部ハ、炎熱ニシテ、年中、雪ヲ見

ルコトナシ。沿海ノ地ト、黄河、楊子江ノ流域



トハ、四時暖ニシテ、地味肥エ、都邑、村落、相連リ、繰綿、砂糖、茶、生絲、米、穀、陶器、漆器、絹布、紙、烟草等ノ産物多シ。上海ハ、支那第一ノ貿易場ニシテ、楊子江ノ

江口ニ近キ處ニアリ。江ヲ遡レバ、南京、漢口、沙市、及、重慶等ノ都會アリ。共ニ製造、貿易、頗盛ナリ。殊ニ、南京ハ、有名ノ舊都ニシテ、支那文學、技藝ノ中心ナリ。

南方海岸ニ、廣東<sup>カン</sup>アリ。古ヨリノ貿易地ナリ。ソノ近傍ニ、香港<sup>ホン</sup>アリ。英國ノ所領ニシテ、東洋艦隊ノ根據地タリ。東洋、西洋ノ間ヲ往來スル船舶、多クハ、コ、ニ寄港ス。

黃海ヨリ、威海衛、旅順口ノ間ヲ過ギ、天津ヲ經バ、北京ニ到ラン。北京ハ、清國ノ首府ニシテ、周圍ニ、大ナル城郭ヲ築キタリ。人口、甚多クシテ、市街雜沓セリ。

コノ國ハ、早ク開ケテ、堯、舜、禹、湯ナド、賢明ノ君主出デ、周、秦、漢、唐、宋等ノ代ニ至リテハ、文物、最隆盛ナリキ。

第十課 滋賀の都

近江の滋賀ハ、一千二百四十年ばかりの昔、  
 天智天皇の都し給ひし地なり。其の跡、今の  
 大津の北の方にありといふ。この頃には、我  
 が國勢盛にして、支那人、朝鮮人の來朝も繁  
 かりき。

天皇大に、制度を振張したまひて、舊來の弊  
 習をも革めたまへり。又、深く、學問を好ませ  
 給ひ、創めて、學校を設けさせ給ひき。大寶以

後、京都に、大學を設け、諸國に、國學を置きて、  
 學問を勵まし、弘文院、勸學院等の學校も起  
 りて、ますく、文教の開けしは、全く、此に基  
 きしなり。

此の頃は、農耕の業、尙、未開けず、諸國に、原野  
 多かりしかば、民を勵まして、田圃を開かし  
 め、又、工業をも獎め給ひて、御親、水時計をも  
 工夫したまひき。されば、高貴の人の妻女も、

みづから、衣服を染め、或は、春の野に出でて、  
若菜摘むなど、風俗、最淳樸なりき。

文法 給ふ、好むナドハ、其ノ語尾は、ひ、ふ、へ、ま、み、  
む、めト活用ス。カク、五十音ノ上ヨリ四段  
ノ音ニ活用スルヲ、四段活ノ動詞トイフ。

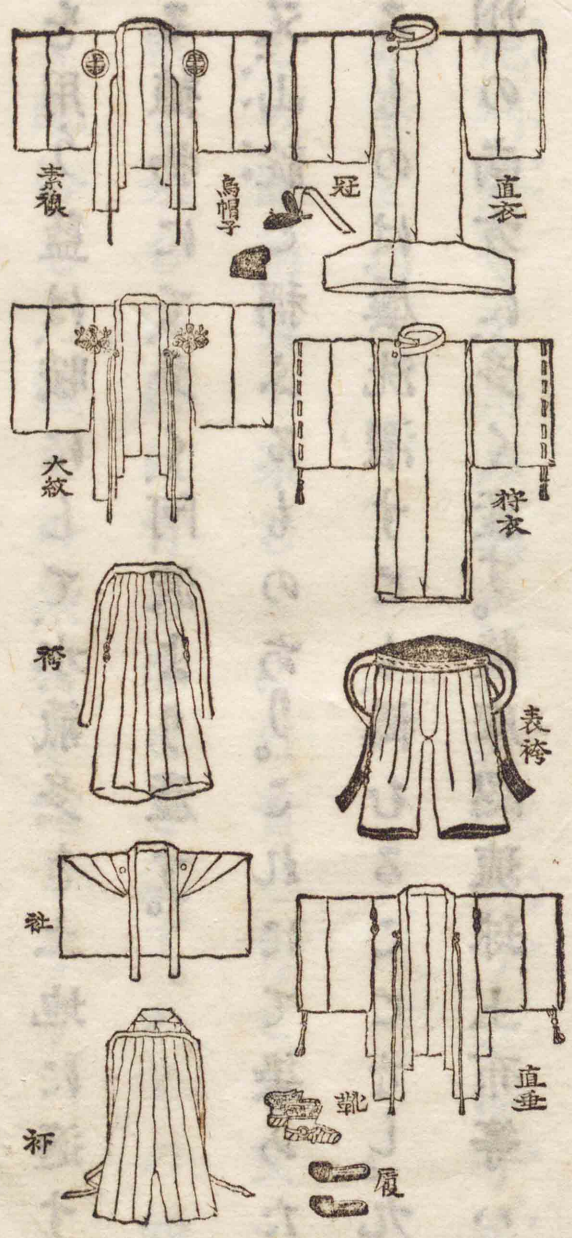
第十一課 衣服

身の健康を保たんには、常に、體温を、適度に  
せんこと、肝要なり。故に、夏は、單衣、帷等を用  
ぬ、冬は、綿入を着、春と秋とには、袷を用う。

其の原料にハ、種々あれど、麻、苧<sup>カウキ</sup>にて織りた  
るものハ、熱を散ずること速きがゆゑに、盛  
夏の候に用ぬ、木綿、毛織等ハ、能く、體温を保  
つものなれば、冬の肌着、又ハ、外套の料とす  
るに適せり。  
衣服ハ、禮儀を修むるに、必要のものなれば、  
その仕立方、取扱方等に注意し、着様をも丁  
寧にすべし。漫に、肌を現し、或ハ、垢つき、綻び

たるなどを着るは、深く恥づべき事なり。  
 さて、上代には、その服制も、甚簡易なりしに、  
 滋賀の都の頃より、其の制漸そなはり、貴人  
 の上衣には、狩衣、直衣等、種々ありて、烏帽子、  
 冠をいたひき、履をはくなど、その風、極めて  
 優美なりき。

武家の世となりては、素襖、直垂、大紋等を用  
 ゐ、後、社袴を以て、一般の禮服とせり。明治の  
 御代となりて、種々の服制定まり、普通の交



際には、男子ハ、羽織袴を用ゐ、婦人ハ、白襟、紋  
 附を以て、禮服とす。

第十四課 染料

染料に種々あり。青色を染むるには、多く、藍を用う。藍は、暖にして、水氣多き土地に適する植物にて、多く、阿波より産す。又、山靛シロと稱ふるものあり。これにて染めたるものは、屢洗濯すとも、褪むることなし。九州の南方に、多く産す。薩摩、総、琉球、上布等ハ、これにて染めたるなり。

赤色には、紅、又ハ、茜を用ひ、黄色には、鬱金コン、山柅シロ、刈安等を用ひ、黑色には、楨椰子シロ、五倍子シロ、鐵漿等を用う。

その他、萌黄を染むるには、黄と青とを交へ、紫を染むるには、青と赤とを混ず。かくの如く配合して、種々の染料を作るなり。

又、石炭より、アニリンといへるを採りて、鮮麗なる紫色の染料を製出す。之に、媒染劑を

加ふれば、色彩の變化、極りなし。近時、化學の  
進歩するにつれて、種々の染料發明せられ、  
色の數も、數百種の多きに至れり。

第十三課 池野大雅

池野大雅ハ、書畫ヲ以テ聞エシ人ナリ。若カ  
リシ時、三弦ヲ好ミ、其ノ頃ノ妙手安永檢校  
トイフ盲人ノ住メル隣ニ、居ヲ占メテ、日々  
ニ、檢校ガ、三弦ヲ、人ニ教フルヲ聞キテ、心ヲ

ヤレリ。

大雅、アル時、檢校ガ家ニ到リテ、殊更ニ、カク、  
近隣ニ住ミタル事ノ故ヨシヲ告ゲテ、一曲  
ヲヒキテ聞カセラレンコトヲ請ヘリ。檢校、  
其ノ志ノ切ナルニ感ジテ、ヤガテ、三弦ヲト  
リ出デテ彈キテ聞カセケリ。然ルニ、其ノ三  
弦、裏皮破レテアリシカバ、大雅、「無禮ニハ候  
ヘドモ、オノレ一期ノ思出ニ、皮全キニテ、今

一曲ヲト乞ヒケルニ、檢校、快カラザルサマ  
 ニテ、其許ハ、何ヲ業トシテ、日ヲ送り給フゾ  
 ト問フ。大雅、答ヘテ、「繪ヲカキ候」トイヒケレ  
 バ、「サスレバ、其ノ繪拙カルベシ。見ルニ足ラ  
 ザルモノナラン」ト、心オキナク言ヒ放テ  
 リ。

大雅、怪ミテ、其ノ故ヲ問フニ、檢校笑ヒテ、「サ  
 レバナリ。今、裏皮ノヤブレタル三弦ヲモテ  
 彈キタルヲ、飽カズ思ハル、由ナレド、ソノ  
 キ、ザマニテ、繪ノ  
 拙サハ知ルベキナ  
 リ。三弦ハ、右ニ撥ヲ  
 モテバ、右手ニテヒ  
 クコト、言フモ更ナ  
 レド、左手ニ、精神ナ  
 クシテハ、到底、妙處





ニハ到ルベカラズ。サルニ其許ハ、三弦ノヨ  
シアシニノミ、心ヲトメテ、其ノ餘ニハオモ  
ヒ到ラヌサマナリ。今、ワガ左手ノ精神、其許  
ノ耳ニ入ラヌヲモテ推スニ、繪モ、マタ、筆ニ  
ノミ、カヲ入レテ、更ニ、左手ニハ、精神ヲコメ  
ジト思フガ故ナリトイヒキ。

大雅、イタク、其ノ説ニ感服シ、深ク、其ノ恩ヲ  
謝シテ歸レリ。ソレヨリ後ニハ、常ニ、心ヲ、コ

コニ用井テ、繪畫ノ道ヲ究メシカバ、遂ニ、一  
家ノ風ヲ具ヘテ、世ニ鳴ルバカリノ名人ト  
ゾナリケル。

ハカナキ業トイヘドモ、妙處ニ達セル者ハ、  
人ノ耳目ノ及バザル處ニスラモ、精神ハ滿  
チタリ。物言ハンニモ、文書カンニモ、只、耳目  
ノオヨブ所ヲノミ、限ト心得タランニハ、彼  
ノ安永檢校ニ笑ハレザランコトオボツカ

ナシ。

(北邊隨筆參照)

第十四課 讀書

書を讀み、字を寫すに、明らけき窓、淨き机、筆、硯、紙、墨の精良なるを得て用うるは、一の幸なり。世に、この幸を受くる人、甚少し。古には、貧しくして、燈なく、雪に對し、螢をあつめ、壁をうがちて、書を讀みし人だにあるを、今、此の六つの助を得て、不自由なく、學問するこ

とを得る者は、時を惜みて、晝は、いふまでもなし。夜も、徒に過すことなく、よく勉むべきことなり。書を讀まんには、その種類を撰むべし。空しく、精力を費して、多きを貪るは、よみすべきことにあらず。聖賢の書を讀みて、古のことに知り、今の理を究めて、それは、かくすべく、これは、如何に行ふべきかを知り、日常、萬事

を處理するに當りて、聊も、さし支ふることをなきに至らば、是、大なる幸なるべし。又、よく、歴史を讀むべし。歴史には、國家の盛衰、興亡、明君、賢相の言行など、一々記しあれば、遠き古の跡、まのあたり、明に見わて、我が身、恰、其の世にあへる心地して、數千年の齡をも保てるが如し。此の樂も、亦、大なるかな。すべての事、友を得ざればなし得べからず。

只、讀書の一事は、友なくして、ひとり樂むべし。一室の内に居て、天下四海の内を見、天地萬物のことわりを知り、數千年の後にありて、數千年の前を見、今の世に在りて、古の人に對し、我が身おろかにして、聖賢にまじはる。是、皆、讀書の樂なり。讀書は、かく、益多く、樂多きに、世人、これを好まず。その不幸甚し。これを好む人、天下の



至樂を得たりと謂ふべし。

(樂訓參照)

第十五課 衛生

身體虛弱ならんには、如何に、才智ありとも、事を成すこと難かるべし。されば、常に、衛生に注意して、身體を健にせんことを心がくべし。

運動ハ、消化の力を盛にし、血液の循環を善くし、肺を健にす。故に、種々の病にをかざるること少く、又、筋骨逞しくなりて、精神、常に活潑なるを得べきなり。清潔を守るも、亦、大切なることなり。常に、垢つかぬ衣服を着、適度に沐浴し、家の内外を掃除し、空氣の流通をよくするハ、健康を保つに缺くべからず。酒と烟草とは、人をして、情弱に流れしむるものなれば、決して、之を用うべからず。又、暴

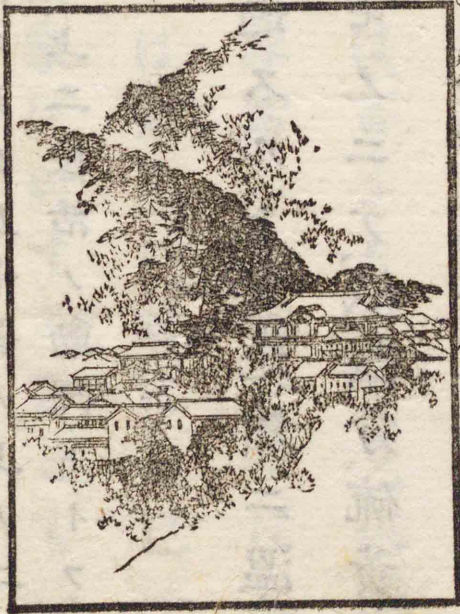
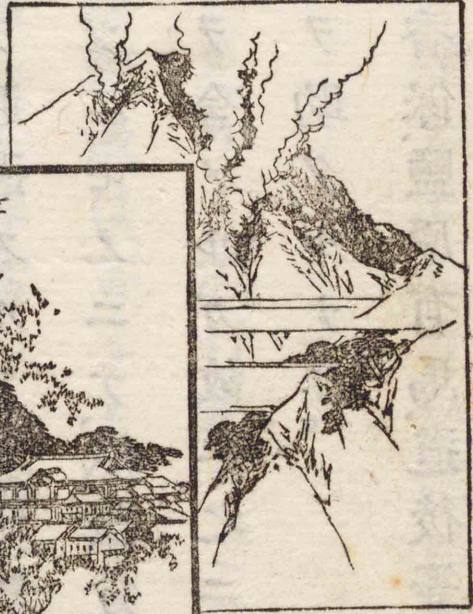
飲暴食をせば、身體をそこなひ、病に罹るこ  
 と多かるべし。  
 人、若、平素、衛生を怠りて、流行病などにか  
 らんには、一家の難儀は、言ふも更なり。近隣  
 の人々にも傳播して、非常の災害を、世に及  
 ぼすに至るべし。されば、衛生ハ、常に、自己一  
 身の爲のみならず、國家に對する務ともい  
 ふべきなり。

文法 用う、忍び、ナドハ、語尾、ゐ、う、うる、うれ、び、ぶ  
 ぶる、ぶれト變化ス。カク、五十音ノ上ノ二  
 段ニ活用スルヲ、上二段活ノ動詞トイフ。

第十六課 温泉

温泉ハ、泉ノ、地中ヲ通過スルトキ、地熱ニ温  
 メラレテ湧キ出ヅルモノニテ、鐵、鹽分、硫黃  
 等、種々ノ鑛物質ヲ含メルガ故ニ、之ニ浴ス  
 レバ、身體ノ健康ヲ助クルナリ。  
 函根、熱海、草津、伊香保、鹽原、有馬、道後等ハ、我

ガ國有名ノ温泉ナリ。中ニモ、函根ノ如キハ、東京、横濱ニ近クシテ、山水ノ風景ニ富ミ、浴客常ニ絶ユルコトナシ。温泉ノ涌キ出ヅル近傍ニハ、必、火山脈アリ。



火山ハ、地球ノ内部ニ存スル熱ノ吹キ出ヅル處ニテ、山頂熾ニ、煙ヲ噴キテ、天ヲ衝ク。其ノ狀、真ニ壯快ナリ。近時、交通ノ便開ケタレバ、温泉ニ遊ビテ、身體ヲ保養シ、風景奇抜ナル火山ノ有様ヲ見テ、雄大ノ精神ヲ養フモ、極メテ愉快ノコトナルベシ。

第十七課 交通

都をば霞やともに立ちしかど

秋風ぞ吹くしらかはの關

こはむかし能因法師の詠みいでし歌なり。  
當時は春霞立つ頃に京都を出で、秋風の吹く季節ふらでは奥州白河には着くを得ざりしを、今は交通の便開けて、朝に汽車に乗らば、明くる正午には着するを得べし。

又、貨物を運び、音信を通ずることも、極めて便利となり、其の要具も、近年、いちじるく進歩したり。

現今、官設鐵道の東海道線ハ、東京より、京都大阪を経て、神戸に達し、日本鐵道會社の青森線は、東京を起點として、白河よりも、尚遠き仙臺、青森等にも達せり。此の他、山陽鐵道、九州鐵道、關西鐵道、兩毛鐵道、炭鑛鐵道等あり。又、電信線をば、到る處、蛛網の如くに架し、

海底電線をも設けたれば、海外各國とも、自由に通信用を得るに至れり。

海上の交通、亦、甚便利にして、沿海の各港、汽船の到らざる處なく、歐洲、米國、濠洲等への航路をも開始したれば、我が海運ハ、日を追ひて、盛大に赴けり。

第十八課 商人

敬次郎ハ、數年ノ商業見習ヲ終へ、國元ニ歸

リテ、吳服店ヲ開キシニ、舊主人ハ、深切ニモ、商業上ノ事ニツキテ、左ノ注意ヲ與ヘタリ。

一筆申入後、此度吳服店所開業のよき芽  
出度存帳簿兩親も定めて、後喜の事と察  
ハ惟

おねぐも中速往通商人とくは先金  
錢の出入を惜むこと肝要よて、後忽にい  
るゝおはづつひく浪費多くありて暮



一 込と相なる

べく候

又高機を知る

こと行要事候

彼の三井八郎

右衛門が幼少

の討日本橋通

に士人の性来繁き哉見て刃の下緒つか



ぶくろをなご高まぶ益あるべしと思立ち

三貫文のまごてを朝より暮までに五貫

文として主人の賞賛を得其後江戸に呉

服の本店を寄き京大阪よ支店哉置きて

傍為替の業を営み自他の便益を圖りし

が如きよく〜 此心得可有候

まべて高法の秘訣ハ小を積みて大を致

すこそまとして有之候一時の奇利を博せん

とそれを却て信用被害して大なる損失  
を被ること可多し限此邊は如才なく被  
成りやう念下存候由

第十九課 信用

信用ある商人は、取引先にて、心を安んじて、  
商品を貸し付くるが故に、少額の資本にて  
も、多額の商賣をするを得べし。一々、現金の  
受渡を要する如くにてても、到底、手廣き商業



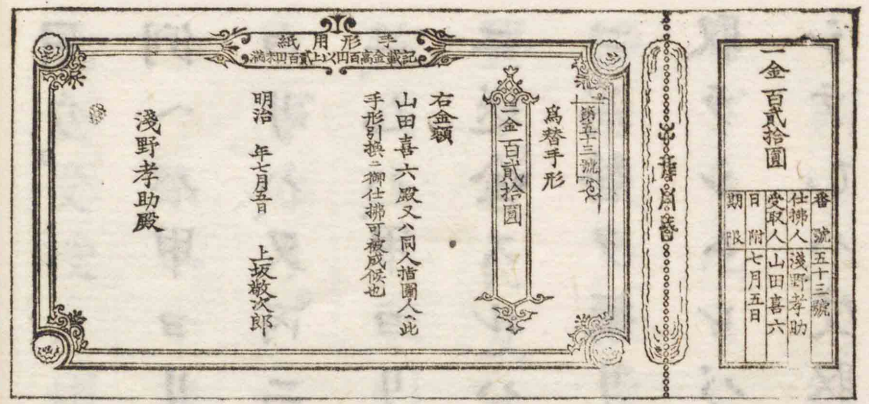
を營むこと能はざるべし。  
信用あれば、約束手形にて、多  
額の品物を取引し、その品物  
を賣却せし上期日に至りて、  
代金を仕拂ふを得るが故に、  
巨額の資本なくとも、相當の  
利益を得べきなり。  
されば、信用は、一種の資本と

も謂ふべし。信用を得んとせば、先約束を誤らざらんことを勉むべく、信義を重んじ、奢侈を戒め、浪費を慎み、律義に、商業を營むを要す。之に反するときは、得意先にては、自然信用上の取引をせざるに至るべし。心すべき事なり。

第二十課 爲替

現金受授ノ煩ヲ省カンガ爲ニ、爲替ノ法ヲ用ウ。

例へバ、甲ヨリ、乙ニ支拂フベキ金アリテ、乙ヨリハ、又、丙ニ支拂フベキ負債アリトセンニ、乙ハ、甲ヨリ、金子ヲ受ケ取り、更ニ、之ヲ丙ニ送金スルハ、甚、手數ヲ要スレドモ、乙ハ、丙ニ爲替ヲ振り出シテ、甲ヨリ、其ノ金ヲ受ケ取ラシムレバ、甲ト丙トハ、直ニ、金錢ヲ受授シテ乙ハ、受取、及支拂ノ手數ヲ省クヲ得ル



ガゴトシ。  
 サレバ、爲替ハ、必、三人ノ間ニ  
 成立スルモノナリ。ソノ證書  
 ヲ作ル者ヲ、振出人トイヒ、金  
 額ヲ支拂フベキ者ヲ、支拂人  
 トイヒ、證書ヲ所持セル者、即、  
 金額ヲ受ケ取ルベキ人ヲ、所  
 持人、又ハ、受取人トイフ。

銀行爲替、郵便爲替、電信爲替等ハ、皆爲替ノ  
 一種ナリ。此ノ法ニヨルトキハ、遠キ處ニ、金  
 錢ヲ送達スルニ、紛失、盜難等ノ虞ナクシテ、  
 極メテ安全ナリ。

文法 例へ、受けナドハ、語尾へ、ふ、ふる、ふれ、け、く、  
 くる、くれト活ク。カク、五十音ノ下ノ二段  
 ニ活用スルヲ、下二段活ノ動詞トイフ。

第二十一課 身の垣

人は、身の垣といふ事を知るべきなり。例へ

ば、家あれども、垣をければ、盗賊のれキそれを免れず。垣あるが故に、心を安んずるを得るが如し。之を、安堵といふ。

堵は、垣なり。されば、家業を勉めて、貧を防ぐ垣とし、養生をして、病を防ぐ垣とし、道を守りて、殃を塞ぐ垣として安堵すべし。此の堵忽なる時は、殃の敵攻め入りて、防ぐに、手段無かるべし。

身の垣とは、慎の事なり。慎は、堪忍にあらざれば、成らず。堪忍の要は、怒を抑へ、言を慎み、悪を避くるに在り。怒を忍べば、心平にして、仁愛人に及び、言を慎めば、過少くして、かならず、近き憂なく、悪を避くれば、行、おのづから、道にかなひて、わざはひに遠ざかることを得べし。若、此の垣無き時は、四方の敵、一時に攻め來りて、防ぐ事かなふべからず。私と

いふものは、透間を窺ふ賊のごときものなれば、しばらくも、この垣を忘るべからず。

(野總若語參照)

第二十二課 衣笠城趾

相州の東南三浦郡に、衣笠城の趾あり。三浦氏の居りし處にして、横須賀軍港を距ること、一里餘なり。其の間、山を開鑿して、路を通じたる處あり。昔、三浦義明が、八旬の老體に

て、源家の爲に蹶起して、敵を防ぎしは、此の邊なるべし。今は、車馳せ、馬走り、何人も、その要害を説かずなりぬ。

城趾ハ一段高くして、坐ながら、四方を瞰むべく、頗、地の利を占めたり。山川の間、尚、昔の名残を留め、かしこには、路開けて、樓門の跡、明に、こゝにハ、斷礎散在して、壘壁のありしこと、紛もなし。枯草、茫々として、谷川の音、幽

に響き、老松立ち并びて、今も翠色の變らぬ  
 など、そゝるに、懷舊の情に堪へざらしむ。  
 城墟より、數丁にして、小池あり。三浦氏の亡  
 びしとき、一門、悉、身を投じて失せにきとい  
 ひ傳ふ。水湛へて、碧に、生ひ茂りたる樹木、之  
 を蔽ひて、物すごさ、言はんかたなし。

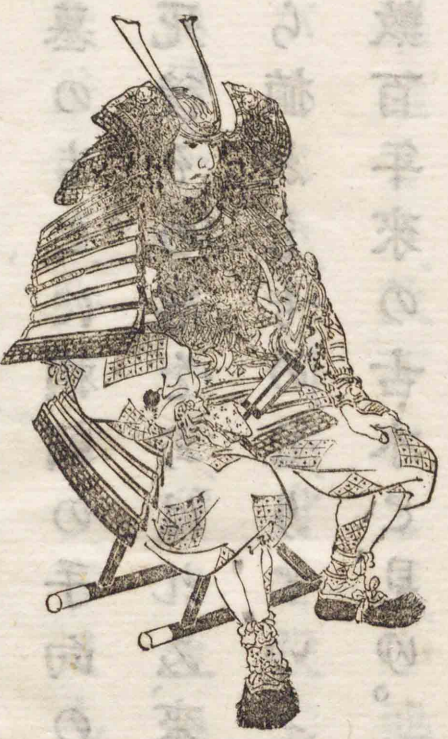
こゝを距ること遠るらずして、義明の墓あり。  
 瓦もてたゞめる、古き垣の中に、苔むした  
 る古碑、二つ立ちて、永く、義士の名残をとど  
 めたり。

墓のもとに、頼朝の手向の躑躅あり。義明の  
 死後、その志をあはれみ、來り詣でて、手づか  
 ら植ゑしものなりといふ。樹ハ、長く生ひて、  
 數百年來の古木と見ゆ。

第二十三課 元寇

今ヨリ、六百年前、蒙古ノ酋長忽必烈、支那全

國ヲ討チ從へ、餘威ニ乘ジテ、我が國ニモ、使ヲ遣シテ、朝貢ヲ促シケリ。



鎌倉ノ執權職北條時宗、大ニ其ノ無禮ヲ怒リ、返書ヲモ與へズシテ、

直ニ、使ヲ逐ヒカへセリ。

後、六年ヲ經テ、蒙古ノ兵三萬、壹岐、對馬ヲ犯

シ、遂ニ進ミテ、筑前ニ到リケルニ、少貳景資等、防ギテ、之ヲ破リ、一將ヲ射殺シケレバ、敵大ニ恐レ、夜ニ乘ジテ遁ゲ去レリ。

其ノ後、蒙古ハ國號ヲ元ト改メ、再、使ヲ遣シテ、朝貢ヲ促シケレバ、時宗、其ノ使者ヲ斬リ、復來レルヲモ、捕へテ斬リ捨テタリ。

忽必烈、大ニ怒リ、一舉ニ、我が國ヲ滅サントテ、弘安四年七月、蒙古、朝鮮、支那ノ兵、十萬餘



人ヲ數千艘ノ船ニ載セ、范文虎等ヲ將トシテ、我が筑前ニ攻メ寄セヌ。忠勇無雙ノ我が兵、イカデカ、コレニ屈スベキ。河野六郎通有等、輕舸ニ乗ジテ、群ガル敵艦ノ間ニ分ケ入り、檣ヲ仆シテ、梯トシ、敵ノ船ニ乗り移リテ奮戦シ、終ニ其ノ將ヲ擒ニセリ。安達次郎、大友藏人等ノ勇士、競ヒ進

ミテ戦ヘバ、敵ハ、船ヲモ寄セアヘズ、退キテ、鷹嶋ノ沖ニ舟ガカリシテアリケルニ、一夜、海上、風暴レ、浪逆捲キテ、敵船、



悉覆リテ、溺レ死ヌルモノ、數ヲ知ラズ。我が兵、機ニ乗ジ、掩撃シテ、之ヲ殲シ、只、三人ヲ殘シテ還ラシメタリ。忽必烈、聞キテ、大ニ恐レ、復、我が邊ヲ窺ハザリキ。

第二十四課 日本刀

我が國ハ、古より、武を尚びしかば、從ひて、刀劍を鍛ふる術も盛なりき。

朝廷にても、また、之を獎勵せさせ給ひければ、吉光、正宗、義弘等の名工、相續ぎて、世に現れ、鍛鍊の法、愈、精巧に赴けり。

これを鍛ふるには、最、丹精をこめ、工場には、注連繩を張りて、不淨を近づけず、數十日の間、鍛鍊を極むるなり。

されば、其の銳利なる事、比すべきものなく、能く、外國の刀劍をも兩斷するに足り、名聲、世界に高し。

北條時宗は、之を用ゐて、蒙古十萬の大軍を  
 みなごろしにし、豊臣秀吉は、これを用ゐて、  
 明韓の兵をきりなびけたりき。  
 げに、武勇なる日本人の氣象ハ、凝りて、銳利  
 なる日本刀となり、銳利なる日本刀ハ、勇武  
 なる日本人に用ゐられ、相待らて、國威をか  
 がやかせるものと謂ふべし。

文法 射、見ナドイフ動詞ハ、い、いる、いれ、見、見る、

見れナドトナル。カク、五十音中、上ノ一段  
 ニテ活用スルヲ、上一段活ノ動詞トイフ。

第二十五課 みるにのみもり

孝明天皇御製

雨にれもひ風にこゝろをくだくかな

民のしわざのたゞやすかれと

山はさけ海はあせなむ世なりとも

きみにふた心われあらめやも

(源實朝)

虎不ゆる國のさかひもものゝふに

ほもるかざりは安けかりけり

(小野古道)

高等小學讀本卷之三終

明治三十二年十一月一日印

明治三十二年十一月五日發

明治三十三年一月一日修正再版印刷

明治三十三年一月四日修正再版發行

印刷行

編輯者 蕪澤

印刷者 齋

發兌



定價	
卷ノ一金貳拾錢	卷ノ五金貳拾錢
卷ノ二金貳拾錢	卷ノ六金貳拾錢
卷ノ三金貳拾錢	卷ノ七金貳拾錢
卷ノ四金貳拾錢	卷ノ八金貳拾錢
全八冊	金壹圓七拾錢

西澤之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

國光社

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

(電話新橋八十八番)

